

NO.7「標識放鳥したタンチョウの生息環境の把握」

平成18年度野生動物保護募金の助成を受けた「標識放鳥したタンチョウの生息環境の把握」の実施結果を次のとおり報告いたします。

タンチョウ保護研究グループ
(旧タンチョウ保護調査連合)
代表 百瀬 邦和

はじめに

2001年から2006年までに釧路市動物園によって標識放鳥された18個体には番号付きACRAFT社製のアルミニウム製カラーリングまたはプラスチック製のカラーリングが付けられており、野外に於いても400～500メートルの距離から番号による個体識別が可能である。

今回の調査にあたっては、この内2002～2005年の4年間に野外放鳥された個体を対象とした。標識放鳥された18羽のうち、10羽は釧路市動物園で孵化した個体であり、8羽が野外で保護された個体である。タンチョウは農耕地で収穫が始まる10月中旬以降から給餌の行われる冬期間に限って足環の確認できる個体が大半のため、また事業の開始時期が秋であったためもあり、観察は個体の生存確認と確認地点の記録が中心となった。

結 果

・放鳥個体の生存状況

放鳥した18羽の内、放鳥後最初の冬まで生存した個体は15羽で、放鳥後の確認ができなかった個体が2羽、3～8ヶ月までの生存は確認できたがその後消息不明あるいは再び保護収容されて最初の冬に給餌場で確認できなかった個体が1羽であった。この時点までの生存率は83.3%ということになる。飼育下で生まれた10羽についてみると、最初の冬までの生存率は80.0%、保護放鳥の個体8羽は87.5%であった。

・年齢による生存率の違い

一方、1才までに放鳥した個体は6羽で、その全てが最初の冬まで生存した。1才以上の年齢で放鳥した個体は12羽いたが、最初の冬まで生存したのは9羽で、生存率は75.0%であった。この内飼育繁殖の個体では5羽中3羽(60.0%)が生存したのみで、保護放鳥個体の7羽中6羽(85.7%)と比して生存率が大きく下回っている。

・性別による生存率の違い

次に雌雄で比較すると、放鳥した18羽中雄11羽、雌7羽であったが、放鳥後最初の冬まで生存した個体は雄8羽(放鳥個体の72.7%)に対して雌7羽(同100%)で雌が高い生存率を示した。なお、最初の冬まで生存した計15羽のうち10羽は2回目の冬にも生存が確認されている。

ま と め

放鳥個体の生存状況について

放鳥後最初の冬までの生存状況は平均72.2%、2度目の冬までの生存率は61.1%である。環境省事業で実施している標識調査では約2ヶ月令の野生個体を標識しているが、その生存状況は約76%と約63%(タンチョウ保護研究グループ未発表資料)であるので、大きな差はなれないことになる。飼育下繁殖個体と野外生活の経験のある保護放鳥個体の比較では、保護放鳥個体の方が若干高い生存割合を示した。

年齢による差異をみると、1才までの年齢で放鳥した個体が全て最初の冬まで生存したのに対し、それ以上の年齢で放鳥した個体は54.5%であった。1才以上の個体に限って飼育繁殖個体と保護放鳥個体を比較すると、飼育繁殖個体の20.0%に対して保護放鳥個体は85.7%である。従って、飼育繁殖個体を1才以上の年齢で放鳥した場合には明らかに生存率が低い結果を示したことになる。雌織で比較すると、雌が高い生存率を示した。

野外における生息環境について

足環によって個体が識別できたのは、ほとんどの場合収穫後のデントコーン畑、牛舎脇あるいは採草地の糞尿置き場、給餌場においてのものであり、放鳥したタンチョウが繁殖を開始するまでの1-3年程度の期間、繁殖地を選定し定着するまでに滞在する環境を知ることはできなかった。繁殖期の行動追跡のためには足環による観察では不十分であるため、PTT等電子信号を利用した方法を用いるのが有効である。

釧路市動物園では、現在も保護収容された野生タンチョウの再放鳥と、不定期ながら飼育繁殖個体の放鳥を継続している。今後も今回のような追跡調査による生存状況の確認調査を続けることでより多くの例数を集め、さらに繁殖活動に向けた野外での情報を集めることによって、飼育放鳥個体が野生復帰し野生個体群に参加していく過程を明らかにすることができるであろう。

収支報告

1. 交通費など	124,654 円
2. 会議費(借上料)など	38,325 円
3. 消耗品費など	117,808 円
合 計	280,787 円 (助成金 28 万円から支出、不足分は会費から充当)